

災害と向き合う

じしんつなみまつだいはなしのたね
—『地震津浪末代噺乃種』(ヤ3-161)—



図1 津波の図



部分拡大 その2



部分拡大 その1

『地震津浪末代噺乃種』は後に安政南海地震と呼ばれる大地震と津波を記録した瓦版を再録した草双紙である。前半は嘉永七年甲寅年十一月四日(一八五四年十二月二十三日)に発生した安政東海地震に揺れた大阪の様子と、後半は翌日嘉永七年甲寅年十一月五日に今度は南海地震により大阪を襲った大津波の顛末を記す。両災害の記事の間には、「大昔(宝永四年)地震津波聞書」と題する百四十八年前の宝永四年十月四日(一七〇七年十月二十八日)に起きた津波被害をともした宝永大地震の記事をはさむ。

現在では嘉永七年に十一月四日に安政東海地震が、翌日に安政南海地震が起きたことがわかっているが、当時の大阪人にとっては十一月四日の東海地震の大揺れからして大変なことで、翌日の地震にともなう大津波被害の記憶が強烈だったために、このような記載となったのだろう。

嘉永七年という年は、三月に日米和親条約の締結、四月に内裏炎上などの大事が起り、十一月に東海・南海の二つの巨大地震の発生という大事件や災厄が多発した。これにより十一月に安政と改元されたが、以後も巨大な地震が頻発した。このため、後には安政前年に起きたこれらの巨大地震を総称して安政地震と呼ぶようになったのである。

地震のエネルギー指標となるマグニチュード(M)換算では安政南

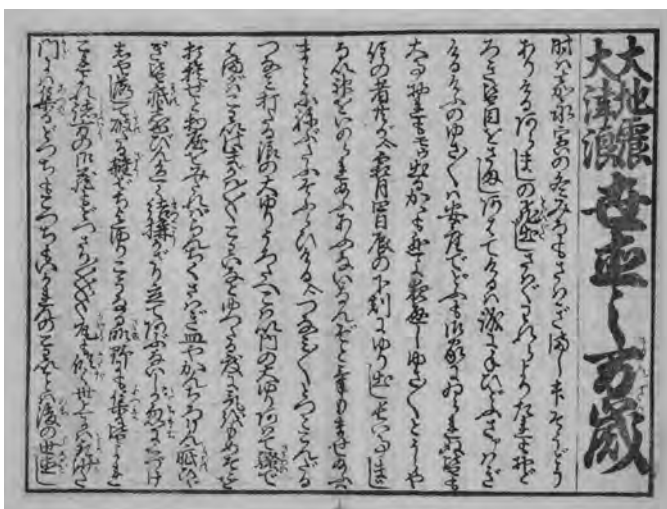


図2 世直し万歳

福の神でもあったのである。

本書の発想にも、災いと福との両面としての地震・津波観が反映しているようである。人死にの数、破船などすさまじい描写は多いが、「世直し」に希望を見出しつつ災害と向き合うとするたくましさもよく現れているのである。

(相田 満)

海地震は八・四で、まだ記憶に新しい東日本大震災(二〇一一年、M九・〇)には及ばないものの、阪神・淡路大震災(一九九五年、M七・三)や関東大震災(一九二三年、M七・九)をはるかにしのぐ。通常、マグニチュードが増えたとエネルギーは三一・九倍となり、二増えると千倍に達するというから、津波をともした大阪の被害がいかに大変だったかわかるだろう。

東日本大震災のこともあって、このごろはHPなどで本書の露出が増えてきているようだが、国文学研究資料館には同名で内容の異なる本がもう一種(M714295)ある。本稿で上掲本を採り上げたのは「世直し」という語で表現する「大地震大津波」世直し万歳」という記事が印象深かったからである。他にも、「大地震相撲取組」では相撲取りに見立てられた「材木矢」の決まり手が「大悦」、「普請方」は「幸七」、「大津波相撲取組」では「大群衆」の決まり手「人の山」などと書かれるものがあり、こちらも興味深い。

江戸時代の「地震鯨絵」を見ると、地震は被害をもたらす災いとだけ考えられているのではなかったようである。逆に、材木屋や普請で生計を立てる人々にとっては、地震が起きたことで富がもたらされる